

佐渡の未来 可能性探る

西三川「学校蔵」10回目の特別授業



佐渡と日本の未来について考えた「学校蔵の特別授業」=15日、佐渡市西三川

佐渡市西三川の廃校を活用した酒蔵「学校蔵」で15日、毎年恒例の特別授業が開かれた。10回目の節目となる今年は、「佐渡から考える島国ニッポンの未来」をテーマに、日本総合研究所首席研究員の藻谷浩介さんから講師が、地方の可能性を語り合った。

地域住民でつくる「佐渡地域力幸醸委員会」が主催。学校蔵は2010年に閉校した西三川小の校舎を尾畑酒造（真野新町）が借り受け、14年に開設した。

今回は、高校生や地元農家など、県内外から70人が参加。講師はほかに、東京大社会科学研究所教授の玄田有史さん、京都精華大前学長のウスビ・サコさんが務めた。

藻谷さんは限界集落について「誰が『限界』って言い始めたんだろう。何が『限界』なんだろう」と疑問を投げかけ、玄田さんやサコさんと議論。佐渡の75歳以上の人口増加率は東京都より低いとするデータを示し、「具体的な数字や現地を知って未来を考えることが重要だ」と呼びかけた。

参加した高校2年の山口真央さん(17)は「島外の人がたくさんいる場で学ぶことで、島の見方が変わった」と話した。

尾畑酒造の尾畑留美子さんは「10年かけて国内外から多様なバックグラウンドを持つ人が交わる場になった。今後も、佐渡をよりよくする化学反応が起きるとうれしい」と振り返った。